

翻訳

クリスティナ・ロセッティの劇的独白（２）

「一番低い場所」——解説と翻訳——

Christina Rossetti's Dramatic Monologues (2)

—— An Annotated Translation of “The Lowest Room” ——

滝 口 智 子

Takiguchi, Tomoko

ABSTRACT

This is the second installment of a series of Japanese translations of Christina Rossetti's dramatic monologues. “The Lowest Room” deals with the doctrine of renunciation of worldly matters, which was advocated by Tractarian preachers and had a direct influence upon Rossetti in her teens. Rossetti articulates her misgivings about this doctrine by ironically presenting a female speaker who, repeating the phrase “vanity of vanities”, adheres to the doctrine to the point of extreme self-denial.

<解説>

クリスティナ・ロセッティ（Christina Rossetti, 1830–1894）作「一番低い場所」（“The Lowest Room”）は 1856 年に創作され、1875 年に出版された詩集『小鬼の市、王子の巡礼、その他の詩』（*Goblin Market, The Prince's Progress and Other Poems*）に収められた。この詩集は、ロセッティの第一詩集（『小鬼の市とその他の詩』1862 年）と第二詩集（『王子の巡礼とその他の詩』1866 年）の合本であり、二つの詩集にさらに多くの詩を加えて編まれたものである。「一番低い場所」は創作年代が早いにもかかわらず、第一詩集に加えられることはなかった。その大きな理由の一つに、ロセッティの出版に助言をしていた兄、ダンテ・

ゲイブリエル (Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882) の反対意見があったと思われる。ダンテ・ゲイブリエルはこの詩が「男性の裏声だ (男性が女性の声で語っているかのような)」として激しい反感をもった。おそらくは女性の生き方をめぐる議論が含まれている点で、女性の書く詩としてはふさわしくないと考えたと推測できる (Jan Marsh, *Christina Rossetti: A Writer's Life*, New York: Viking, 1994, pp.180-81)。

当初詩のタイトルは「ホメロスの書物にかんする口論」(“A Fight over the Body of Homer”)であった。しかしダンテ・ゲイブリエルの助言を受けて、現タイトルに変更された。「一番低い場所」という現タイトルは、「一番低い場所でもいいから、神の御許に」との語り手の願いを表しているように見えるが、詩の内容がこの態度を追認しているとは限らないので注意が必要である。

この詩は劇的独白の形式で書かれており、複雑な語りの構造をもっている。語り手は二人姉妹の姉である。彼女は、「沈黙した聴き手」に対して長い独白を行う。その独白の中で、20年前に自分が妹と交わした会話を再現させている。20年前、姉は人生はむなしいとの考えにとりつかれていた。ホメロス作品に描かれている、復讐と犠牲の精神を生きる男たちの物語に感銘を受けた彼女は、自分たちの人生をそれと比較して空ろであるとし、軽蔑する。それに対して妹は、「人生は自分で創り出すもの」だと語り、受動的な態度で現状を嘆くだけの姉を諭す。妹は我慢強い女性であるが、姉の頑固さと度を過ぎた否定的態度に業を煮やし、短いが激しい言葉で姉に反論する。普段は穏やかな妹の反論に驚いた姉は沈黙し、言いすぎたと感じた妹が心から謝って会話は終わる。実のところ姉は、様々な点で自分よりも優れている妹に嫉妬していた。ひそかに慕う男性も妹と婚約し、何も達成できずに「低い場所」にいる自分をむなしく感じていた。彼女は聖書における「空の空なるかな」という言葉を現世否定の思想ととらえ、それを言い訳にしてただ諦念のうちに生きていたのだった。

20年前の妹との会話を再現し終わった語り手は、次に現在の妹と自分の境遇を聴き手に語り始める。そこで妹はかつてのように美しく、ますます榮えて暮

らしていること、語り手は今も孤独に、自分の世界に閉じこもったまま生きていることが明かされる。つまり語り手は、妹との過去の会話から何一つ学ばずに年月を過ごしていた。そして今も相変わらず「一番低い場所」で満足し、「先の者にはなれない」との思いを胸に生きている。詩はこの頑固な姉の姿を、彼女が語る独白を通してアイロニカルに描くことで、諦念と忍耐に生きる女性のあり方に疑問を投げかけている。

このような詩のアイロニーは、劇的独白という形式を用いることによって効果的に生み出された。劇的独白の特質のひとつは、語り手の自覚的な語りとその無意識的に表れた意味の間にギャップがあるという点だ。語り手は自分でも気がつかないうちに、自分の弱点を読者に対して露呈しているのである。

なお、語り手の心に定着していると思われる「この世は空しい」という現世否定の考えや諦念は、この詩の創作時にロセッティが身近に触れていたオックスフォード運動の思想家たち、なかでもピューージー（E. B. Pusey, 1800-82）の説教と親近性をもっていることが指摘できる。ロセッティは「一番低い場所」の創作をとおして、間接的にそうした思想に女性が感化されることの危険性を示唆したと捉えることも可能であろう。

翻訳の原詩として、テキストは Christina Rossetti, *Goblin Market, The Prince's Progress and Other Poems* (London: Macmillan and Co., 1875) を使用した。なお、原詩ではひとつの連は4行となっているが、字数の収まりを考慮して翻訳では3行とした。「一番低い場所」にかんして、訳者は『『地上の空しさ』への回答——クリスティナ・ロセッティの劇的独白』『文学と評論』第3集第3号（平成16年12月、2-12頁）において論じている。

<翻訳>

「一番低い場所」

初夏の光とそよ風から隔てられた花のように

日ごとに私は朽ちてゆき、髪には

白いひと筋が見えはじめていた。

私「生きて死んでゆくだけの人生に いったい何の意味があるの？

死とは何？ 人生は儚い泡のよう、

私の命も同じこと。私とは何？」

妹「何がそんなに悲しいの、教えて姉さん、

私も分かち合いたいの。」妹が問いかけて、

刺繍を刺す白い手を止めた。金いろの髪に縁取られた顔を上げて。

豊かに揺れる巻き毛、私よりも柔らかな色の瞳。

すらりと伸びた背は私よりも高く、

優しい声をもつ妹。

私「誰もが一番にはなれっこない、誰かが後になる。

これも空しいことではないかしら？

私はつまずき、堕ちてゆくばかり。

きのうヘクトールの一節を読んでいたの、勇ましい神々が

怒れるアキレスと戦う場面よ――

偉大なホメロスの物語には、毒があるわ。」

器用な手先で糸を操り、きれいな顔をこちらに向けて

妹は「姉さん、ホメロスの毒ってどんなもの？

偉大なホメロスが残した毒って？」

私「葡萄酒のように胸の鼓動を早め、

風が運ぶ香りのように、心を和らげてくれるホメロス。

アイアスの右腕のようにたくましく、

ユノーの瞳のような威厳を備えた詩人。

私には人の心を和らげることも、燃え立たせることも、

揺さぶることもできない。それにあの時代は黄金の日々、

現代は不純な時代だもの。」

器用な手先を動かしながら、女性らしく優しく笑う妹。

「どんな日々だったの、黄金の砂が流れて

時を刻んでいたその頃は。」

私「そのころの男は力強く正しい男たちよ、

腕力があり、重い槍をふるい、

進軍する彼らの言葉は、誠実そのもの。

槍を手にし、かぶとを頂いた王たち。

突撃で槍が折れれば、頑丈な樹を引き抜き、

岩を放り投げもする。

敵と間近に戦い、死に際には確固たる態度、
男の中の男というべき彼らには、鉄砲を使うなど
思いもよらないことだったでしょう。

彼らにはわかっていた、殺めたのは誰の手か、
体勢が崩れても屈しなかったのは誰か。
強ければ敵を崇拜し、落伍者は味方でも軽蔑する。

運命に翻弄されても穏やかに、
見放す天にも敬虔さを失わず、憎しみはより深く、
愛はより強く。

天上的な美女が争いを引き起こし、
天上的な美女が争いを鎮める。
現代の妻よりも、奴隷の方がよっぽど崇拜されていた時代よ。」

妹が再び笑った、私の妹が。
刺繍布を手にしたまま彼女は答えた、
「私は妻でも奴隷でもなく、今のままでいいわ。」

私「その頃の奴隷の方がまだましよ、今の
空虚な生活に比べたら。
昼も夜も、清らかで神聖な時が流れていたわ。

機を織り続ける王女を、侍女たちも手伝っていた。
針を刺す布には、兵士らがたたかう
戦場が広がっていた。

見上げれば、月の女王ダイアナがお供の夜に囲まれて、
完璧な美しさで輝いていた。その空ろな白布にカットワークを
施すよりもどんなにいいことか。

恥ずべきだわ、この目標のない生活。
金の馬小屋で、銀の食器から
馬に小麦を与えている方がましよ。――

その馬が、夫を敵地まで安全に送り届ける
忠実な馬、私になでられるままに
首をもたげる忠実な馬であればなおのこと。」

刺繍する妹の手が動揺して、一瞬止まった、
でもその後、何事もなかったように、
「でも馬が、乗り手が倒れてしまったら、どうするの？

異邦人に囚われて、異国のパンをかじるほかになく、
飢えに苦しんだとしたら。犠牲という運命を負ったなら、
それが幸せと言えるかしら？」と問いかける妹。

鏡のように心を映す、情熱をたたえた瞳、
口ごもり、手を止めた妹。
その輝く瞳、燃える頬、なんて美しいわたしの妹！

私「そうねお望みなら、その頃を不純な日々としましょうか。
今はさしずめ黄金の時代とでも。でもその頃は生き生きと暖かい
輝きがあったのは事実よ、現代は冷たい日々なのに――

とるに足らないことばかりの、冷たくどんよりした日々、
英雄的な成長が何もない日々。どちらの時代が
無価値だと証明しても、今更どうしようもないけれど。」

「でも人生は自分で築き上げるものよ。」と妹は言う、
「何が得られるのかはわからない。それでも自分の手で築くのよ。
神の七つの灯火で、清らかになれると言うでしょう。」

百年の夢は短いけれど、一日の労働でも成しとげられることがあるわ。
私も、姉さんも、英雄の強さを勝ち得ることが
できるはずよ。

人生は白紙で与えられるから、
よくも悪くもするのは私たち自身。
自分が最初ではなくて二番めなんて、誰が決めたの？

ホメロスから学ぶがいいわ、お望みなら、
彼の本に書いてある知恵を。
アイアスやディオメデスの輝かしい物語が語られているから。

生死を越えて、崇高な行いで名を残す
英雄たちは 称えるべきだとしても、
怒りに身を任せた怠惰なアキレスは人間以下よ。」

私「アキレスが人間以下ですって？ 神と人間の子で
戦いから退陣すればギリシャ中を不安にさせ、
出陣すればイリオン（トロイ）を怖れさせたあのアキレスが？

彼はかけがえのない、愛しい友（親友パトロクロス）の死にあって
復讐を誓い、一生悲しみ抜いたのよ。

獣たち、トロイ人たち、敵対する神々、自分自身をも
生贄として捧げたのよ。

世界中が褒め称えるホメロスによって描かれたアキレス、
友のために自ら犠牲となったそのアキレスが、
墮落した現代の人間以下だというの？」

妹「ドングリを食べて太ったイノシシだって、
それくらいのことはするわ、牝ライオンだって
わなにかかって苦しむ仔の為に血を流すわ。」

ここで妹ははっと口をつぐんだ。私たちの目と目があった。
妹のあざけりに、私の顔は青ざめた。妹はすぐに立ち上がり低い声で
「言い過ぎたわ。ごめんなさい、お姉さん。」

私には、今の日々は快いばかりなの。この家も
心から安らげる場所よ。言い過ぎていたら
ごめんなさい、そんなつもりではなかったの。

ホメロスは彼の描いた神々より偉いけれど、
荒けずりの価値観と兵士たちを描いて満足していた。彼の物語が、
キリストのことを学んだ私たちに何の意味があるのかしら？」

妹の悲しそうな声、涙を湛えた瞳、
青ざめた頬は、愛情の強さを物語っていた、
彼女は私への愛情から、語っているのだ。

妹は柔和で、口数少なく、優しくて
共感の心を持ち、いつも私の話に耳を傾け、
敬意を払ってくれる。

私は六つ年上。妹の半分も幸せではなく、
賢くも善良でもない。妹の言葉は、
私のひそかな秘密に突き刺さった。

妹は知らない、私が密かに妬んでいることを。
悪魔の罪であるプライドが、利己的な不満を生んでいる。
妹の言葉はそんな私への鋭い批判となった。

私は苦々しく笑いながら、冗談めかして言った、
「賢者の中の賢者が人生の要約を残したわ、
空の空なるかな、とね。

太陽の下新しいものは何もない、
人は栄え、衰え、流れてゆく。人生に飽いたのは
私だけじゃない、ソロモンも同じ。

世界の賢者の中でも、あのホメロスが、
この教えを語ったわ。海はとこしえに満たされない、
人の心もおしなべて満たされないと。

ホメロスは感じたのよ、男たちの栄光を
語り、その空しさを語りながら。
ジュノーの神でさえ、この運命は変えられないと。

これ以外には、確かなことなどないわ——
勝者は負け、生ける者は死ぬ。
すべては暗闇に消える、この世はすべて空しいものよ。」

私が黙ると、妹はなかば独り言のように
つぶやいた、低い、愛情のこもった声で、
「ここにいらっしゃるわ、ソロモンよりも偉大な方が。」

二人とも黙った、妹も、私も。
妹は刺繍を置いて、優雅に
軽やかな足取りで、庭へ散歩に出た。

私を傷つけたという思いから、いつもよりは沈んだ様子。
木々の間でさえずる小鳥のような
本来の明るさはなかった。

私は本を手に取り、ぼんやり考えながら、
ひそかに目で妹の姿を追った、
妹が自然に手際よく、花を選んでゆくのを見つめていた。

美しく花を生ける妹には、私がいくら本を読んでも得られない
賢さがあった。妹自身が新鮮で
桃の花よりも気品にあふれていた。

生まれながらに私よりも高貴な妹、

同じ巢で育った小鳥なのに。

誰のせいでもないけれど、耐え難いこの思い。

妹を見つめている私の手から、本が音もなく

やわらかな床に滑り落ちた。豊かな夏の風景が

いつにましてかすんで見えた。

そのとき妹の手の細やかな動きが止まり、頬に赤みが射した。

誰の足音が近づいたのか、私には分かっていた、

誰の声が妹の名を呼ぶのかも。

* * * * *

あれから20年の月日が流れ、私の妹は

りっぱな妻になった。今も変わらず美しく、

穏やかにこれまでの人生を振り返っている――

幸せなこれまでの人生を、悲しみも、恐れも、苛立ちも

ない日々を。あの日、愛し愛された妹は

今もお、愛し愛されている。

堂々としたすばらしい夫こそ、妹が

この世で一番大切に思う宝。その横には

金色の巻き毛をした、妹に瓜二つの少女。

妹の若い頃にそっくりの、かわいい娘。

美しくて、穏やかで、妹のように

愛情にあふれて。

世界を包みこむ愛の心を持ち、

このうえない優しさで家庭を守る妹は、

愛という名の家庭の地に、大切にしまわれた宝物。

祝福された神の畑として栄え、

地上にしっかり根をはって、たわわに実をつけ、

天に向かってどこまでも伸びてゆく。

私は腰下ろし、妹の顔を見つめ続ける。

心軽やかに、庭で花を摘んでいた少女時代から、

ちっとも変わらない、心優しいわたしの妹。

私を傷つけた悲しみで、歌声はいつもより

沈んでいたけれど、小道を踏む足音を聞くと、

何もかも忘れて心躍らせた妹。

えっ、私はどうか、ですって？ 私なら一人で待ち続けていただけよ。

自分だけの世界で孤独に生きるのが私の運命だから。

感じることは表には出さずに。

長年かけて学んだのは、先の者にはなれないという過去の教訓。

一筆一筆刻み込むように、苦しみがらも、有難いことに、

やっと骨身に沁みてわかったの。

だから今、一年、一年と日々を耐えて生きている。

ここが私に割り当てられた場所なのだから、
一番低い場所で満足して、生きているのよ。

それでも時折、力を失いかけたとき、人生が重苦しく

思えるとき、あの丘を見上げてみる。きっとそこから、
助けがやってくるのだから。

そう、天使の吹く喇叭の音を思って、励みとしているの。

その音が聞こえるときこそ、すべての秘密が明らかにされ、
多くの後の者が、先の者になるだろうから。